ONE'S *voice*

野田秀樹×アイタイヒト

VOICE.3

シルヴィウ・プルカレーテ
& コンスタンティン・キリアック

演劇は絶対になくならない。その信仰が僕らを支えている。

野田秀樹が2年前にルーマニアのシビウ国際演劇祭でその作品を観て以来、強く惹かれているというプルカレーテの演出。今回『ルル』の上演で来日したプルカレーテのワークショップにまで参加した野田が、誰よりもその演出や人柄をよく知るキリアックとともに魅力を語った。

プルカレーテ　今回のワークショップでは、子どもがやるようなエクササイズを提案したんですが、そんな内容にもかかわらず、野田さんがわざわざ参加してくださったことを、とてもうれしく思います。ほかの俳優さんたちも、みなよく準備されていて、俳優としての技術も高く、才能のある人ばかりで感心しました。ルーマニア人と日本人の違い？まあルーマニア語が得意な人たちと日本語が堪能な人たち、という差だけでしょう(笑)。特定の作品を創ることになれば、文化の違いは関係してきますが、根本的には、俳優は舞台の上でどう生きるかがすべてですから。

野田　まったく同意します。文化的な背景の差より、役者としての能力差の方が大きいですよね。同じ日本に育っていても、ものの見方がまったく違う人間がいるわけで。

プルカレーテ　ダメな役者もいい役者も世界共通ですね。優れた俳優は舞台の上に人生を描くことができ、ダメな俳優は舞台に穴を空けてしまう。

野田　今日のワークショップを見ていて思ったんですけど、ダメな役者は、説明をしようとしますよね。べつにプルカレーテさんは説明を求めているわけじゃないのになあ……と思いながら見てました。

プルカレーテ　おっしゃる通りです。

野田　でも、忍耐強くやってくださっていましたね。僕がプルカレーテさんの作品を初めて観たのは2年前のシビウでしたけど、とにかく、ものすごくおもしろかった。言葉で説明するのは難しいんだけど、「匂い立つ」というのかな。ほんとうに何かが匂ってくるような舞台で、言葉だけでなく、人間の身体を重視した、ビジュアルをしっかり考えている演出が素晴らしいと思いました。演劇というのは、本来そういうもののはずなのに、いま世界的な風潮として、たとえば映像に多くを頼ったりして、生身の身体への信頼が低いものが増えている気がするので、なおさら貴重に思えるんです。やっぱり演劇という行為は、世の中がどう発展しても、絶対に消えないものなわけですよ。なぜなら、もっとも原始的なものだから。これは若い時からの僕の演劇への信頼であり、信仰でもあるんです。

プルカレーテ　そう。演劇は、蠅みたいにずっと存在し続けるものです。

野田　プルカレーテさんの作品を観た時に、ほんとにそれを感じたんですよ。そしてこういう舞台は、日本では観られないものだから、ぜひお呼びしたいと思ったわけです。

プルカレーテ　私の演出は、ルーマニアでも異端扱いされているんですが、自分としては特別な理論や方法を用いているつもりは一切なく、ただ、自分が感じたままを演出しているだけなんです。あくまでも大事なのは、自分の感覚。

――ここから『ルル』でシェーン博士を演じたキリアック氏が合流。氏が芸術監督を務めるシビウ国際演劇祭では、プルカレーテ作品を必ず上演することを特色にするなど、プルカレーテ氏とは深い信頼関係で結ばれている。

キリアック　シルヴィウ(プルカレーテ氏の名前)はとても謙虚で、自分の仕事の自慢をしない人なんですが、彼の仕事を綿密に分析していったら、きっと偉大な研究成果が得られると思いますよ。彼は作品ごとにまったく新しい挑戦をしていて、同じところには決して安住しないんです。シビウ芸術祭のために創ってもらった『ファウスト』(2007年の初演以降、毎年シビウ国際演劇祭で上演されている大スペクタクル作品。『ルル』のルル役オフィリア・ポピがメフィスト役を演じている)はたいへんな評判になりましたが、その直後に提案された『ルル』は、規模も表現のしかたも、まったく異なるものでした。すべての作品をゼロから創っていくのが、彼の演出の特徴と言えますね。

野田　2年前にシビウで3作品を観た時に、それを強く感じました。自分も作家として新しい作品を考える時に、前と同じものをやってはいけないと思うタイプなんですが、中には、観客が期待する通りのものを創り続けるタイプの人もいますよね。比べると、前にやったものを否定していく表現者のほうが大変で、僕も、創っているとどんどん選べる道がなくなっていく気がして、ほんとに苦しいんです。だから、あれだけまったく異なるものを創っているプルカレーテさんはすごいと思う。

プルカレーテ　方法や方針を変えようと意図したことは、一度もないんです。上演する作品が決まると、それが自分を導いてくれる、という部分が大きいですね。野田さんがおっしゃるように、前にやったことを否定していくのは難しいことで、意識して「違うものを創る」と宣言してしまうと、なかなかできないものですよ。

野田　いまそのお話を聞いて、今西錦司さんという、ダーウィンとはまったく異なる進化論を唱えた人の「変わるべくして変わる」という言葉を思い出しました。つまり、「変わらなきゃ」と無理をしても、変われるものではない。意図的に「新しいものを創らなければいけない」という意識を持つこと自体が、ダメなんですよね。

プルカレーテ　まったくその通りだと思います。いいお話ですね。

野田　僕じゃなくて、今西さんの説ですけどね(笑)

プルカレーテ　その説を自身に引き寄せて、活かしていこうとしているところがいいのですよ。

キリアック　野田さんが東京芸術劇場の芸術監督になってから、劇場もいい方向に変化していると聞きましたよ。

野田　まあそれは、まわりの人たちが動いてくれているからです。今回も「プルカレーテさんの作品を呼びたい！」と言い続けていただけで、実現しましたからね。

キリアック　野田さんが大変な努力をしないと、まわりの人はついてきませんよ。私も同じ立場だから、よくわかります。芸術監督としていい仕事をされてるんですよ。

野田　芸術監督の仕事かあ……。そういう実感はあまりないんですよね。たとえばこの座談会だって、芸術監督の仕事というより、プルカレーテ作品への興味から、やっているだけですから。

キリアック　その言葉、いいじゃないですか。このページのタイトルにしましょうよ。

野田　「仕事ではない。興味だ」ですね(笑)

取材・構成：伊達なつめ
協力：ベル・オーブ東京芸術劇場店

今回のアイタイヒト

SILVIU PURCARETE

シルヴィウ・プルカレーテ　1950年生まれ。ルーマニアを代表する演出家。1990年、国立クライオーヴァ劇場で上演の「マクベスの場面によるユビュ王」が翌91年にエディンバラに招かれ、批評家賞最優秀作品賞を受賞し、世界へと躍り出る。ルーマニアからは国家勲章を、フランスからは芸術文化功労シュバリエ章を授与されているほか、ピーター・ブルック賞(1995年)、国際シェイクスピア・フェスティバルのシュリー賞(2006年)など受賞多数。今回の『ルル』は、『タイタス・アンドロニカス』(1992年・東京)、『テンペスト』(1996年・札幌・東京)に続き、日本での3作品目の上演となった。

CONSTANTIN CHIRIAC

コンスタンティン・キリアック　ラドゥ・スタンカ劇場の芸術監督兼シビウ国際演劇祭ディレクター。ルーマニア中央に位置し、中世の町並みが残る人口約17万人のシビウ市で、1994年「シビウ国際演劇祭」を立ち上げる。本芸術フェスティバルは、世界70カ国以上の舞台芸術が参加し、エディンバラ、アヴィニオンに次ぐ規模に成長した。2007年には、その実績により、シビウ市は、欧州文化首都に指定され、地域の発展に大きく貢献。さらに、今回の来日公演では、俳優として、主人公ルルを拾い、愛憎の人生を歩むシェーン博士役を演じた。

野田秀樹 HIDEKI NODA

のだ・ひでき　劇作家・演出家・役者。1976年に劇団「夢の遊眠社」結成。数々の話題作を上演し、演劇界に大きな影響を与える。92年に劇団を解散し、ロンドンへ留学。帰国後の93年に「NODA・MAP」を設立し、『キル』『パンドラの鍵』『THE BEE』『ザ・ダイバー』『ザ・キャラクター』『南へ』『エッグ』など、次々と話題作を発表。国内のみならず、海外の演劇人との創作活動や、歌舞伎の脚本・演出なども手掛け、精力的に創作に取り組んでいる。2009年、東京芸術劇場芸術監督に就任。13年4月からは、当劇場プレイハウスにて、三谷幸喜演出『おのれナポレオン』に出演。NODA・MAP新作公演を10月に予定。

『THE BEE』English Versionワールドツアー2013が決定！
5月末～6月 イスラエル・フェスティバル、明洞芸術劇場(韓国)、シビウ国際演劇祭で『THE BEE』English Versionの上演が決定しました！詳しくは、劇場HPにて。